

戦後81年 2つの「平和のつどい」

語りつぐ戦時の記憶、戦争体験

戦後81年、名張市内では2つの「平和のつどい」が催され、多くの人々が戦争と平和について思いを巡らせた。中学生が語る平和への思いが、列席者を感動させた。(千種啓義)

青蓮寺で「平和の集い」

1945年、名張市青蓮寺の山中に墜落した米B29爆撃機の乗組員2人を追悼し、地元戦没者を悼む「平和の集い」が、8月15日、墜落現場付近の青蓮寺二ノ谷で行われた。米兵追悼碑の建立から20年を迎え、米兵らの冥福と、平和の大切さを次世代につなぐ思いを等しくして、住民ら約70人の参加者は黙祷し、献花した。

6月5日、神戸を空襲したB29の1機が、日本軍戦闘機の攻撃を受け青蓮寺の山中(二ノ谷)に墜落した。搭乗員11人のうち2人は死亡し、9人はパラシュートで降下したが住民に捕らえられ、8月10日前後全員処刑(斬首)された。

墜落B29の機体番号の書かれた破片が青蓮寺の地蔵院に落下した。前住職耕野一仁さん(77)の父、当時住職の耕野一弘さんは「戦争の犠牲者は敵も味方も同じ」として、その破片を本堂内に安置し供養を続けていた。

思いを引き継いだ前住職の一仁さんは2006年墜落現場に、地区の協力を得て追悼碑を建立し、翌年には11人の米兵の氏名年齢・階級を記した石標を加えた。以来



前住職の耕野一仁さん

「平和の集い」は、名張ユネスコ協会、市宗教者連帯会、そして地蔵院でつくる「平和の集い実行委員会」で続けられている。

この日の集いでは、バイオリンとレコーダーによる日米両国歌の演奏の後、地蔵院の耕野一仁住職(43)が「戦争で犠牲となった多くの若者とその家族の心中を察する時、戦争を憎み、平和の大切さを後世に伝えることを約束します」と追悼の言葉を述べた。

一仁前住職は、多くの戦死者の出た地元や、米軍の空襲など当時の時代状況を話した。「追悼碑建立について話をしたとき、青蓮寺遺族会の人々には、米軍慰霊の碑などは住民感情として受け入れ難いと思っていたが、『現地の人が供養してくれたら嬉しいやないか』と言って、意外な協力をいただいた。反対が多いと思っていたが、温かい心に感激した」と追悼碑建立当時の心情を話した。

参加者は追悼碑に献花した後、少し離れた地蔵院に移動し、平和のハトを放し、戦争犠牲者の慰霊と世界平和を祈り、戦後81年の思いを込めて平和の鐘(梵鐘)を81回鳴らした。

『風化させない』戦争の記憶

7月25日、名張市の百合ヶ丘市民センターで「平和の集い」に先立ち『風化させない』戦争の記憶が催された。市民3人が親族から聞いた戦争体験や、行政の関わりについて話した。

同市神屋の農業(元名張市職員)橋本裕徳さん(71)は、旧満州で戦争を終えた父橋本定夫さん(1918〜1995)から、少しづつ聞きだした戦争体験を話した。満州独立守備隊の曹長だった定夫さんは1939年2月に旧満州に渡り、53年9月に復員した。

45年8月9日ソ連軍が攻めてきた。圧倒的な軍事力の差で、交戦にはとても及ばず、民間人と共にひたすら逃げた。50日間の逃亡中、子ども連れの親は、乳幼児がいつの間にかいなくなったり、現地の人に預けたりするのを見た。食料の調達に苦労や略奪に会うなど、想像を絶する日々であった。50日経過して9月29日武装解除となり、抑留生活となった。日本軍兵士の多くはシベリアに送られたが、定夫さんは中国東北部に残った。病弱なら送られないだろうと思って仮病を使ったという。現地(黒竜江省)で炭坑労働に就いた。49年落盤事故に遭い大けがをしたが、輸血で助けられた。53年9月、復員した。この8年間、国交がないので音信不通、生死不明。家族は模糊とした不安を常に抱えて日常を過ごしていた。

満州で国を守ると言うが、現実は何を守り、誰と戦ったのか。国のためと教えられた構図が成り立たない。日本軍のために働いていた人が、人民裁判にかけられた。何のために戦ったのか。言うても仕方ない、分らないだろう。父・定夫さんの胸中を、裕徳さんは察する。

遺品の中に、綺麗に手入れされた中型のシオルダーバッグがある。図囊(ずのう)と言って、作戦中の図面などを入れて携帯していた。部下だった三波春夫さん(シベリア